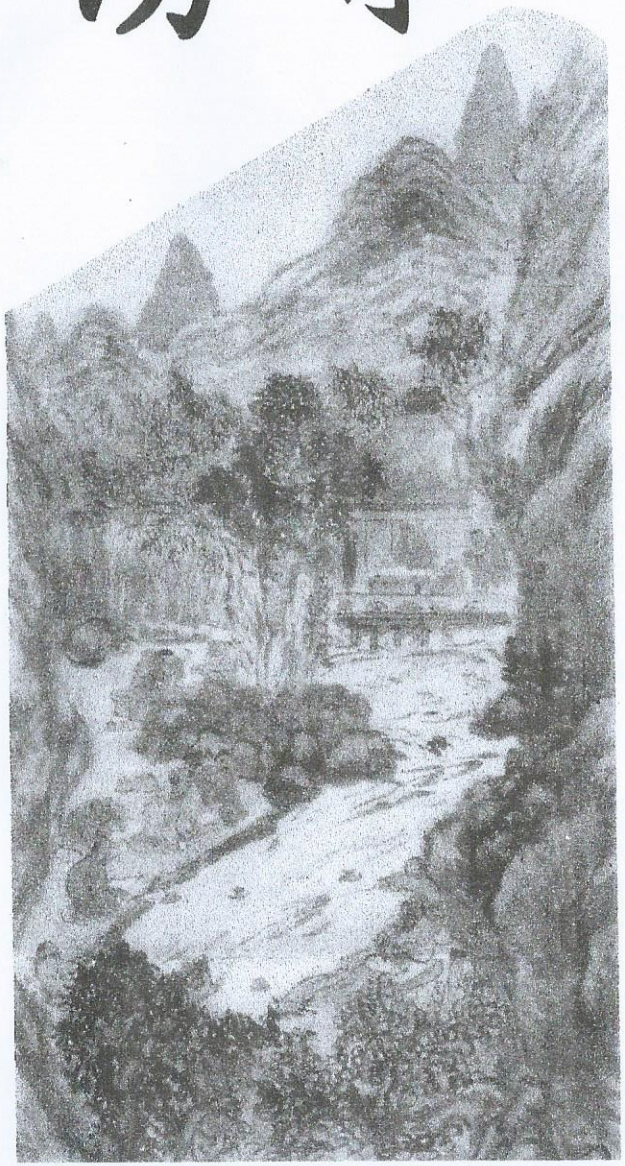
平成二十五年一月発行（年二回発行）
『湧水』 通巻第二号

湧水



千代田岳精会
自作自詠俳句研修会

右上から　鳴雪・紅緑・四方太・碧梧桐　左上から　瓢亭・虚子・不折　（不折画）

千代田岳精会研修部・自作自詠（俳句）部門
ティームリーダー　橋本千舟

『俳句と吟を楽しみましょう』

俳句は難しいと初めての方は言われます。確かにそういう面もありますが、初めから良い句は出来ません。自分で作るとなると何となく特別な事に対する様に構え、格好良く作らないと恥ずかしい等と考えてしまいがちです。　俳句は、季題（季語）の入った五・七・五の一七文字の文学です。季題については、歳時記（季語を分類して解説や例句をつけた書）をよく読んで勉強して頂きたいと思っています。作句に当たって心掛けたい事は、発見や感動したことについて、五感を働かせて良く観察する事が大事です。また、報告・理屈・教訓などの句は避けたいものです。これ等の句には詩情がありません。俳句は日記であり、自分の記録です。したがって、自分自身を基点として詠むとゆふ姿勢が大事なのです。そうすれば，風景を詠んでも人事を詠んでも、作品の中に作者の顔が見えてきます。とにかく、見たまま感じたままを、素直に自分の言葉で作る事が大事です。特に吟行は句作りの原点です。日常を離れて非日常の世界に触れるわけですから、あらゆるものが新鮮に見えて、素晴らしい感動に接する事と思います。そして終生忘れる事の無い俳句が生まれてくる事でしょう。私自身、今まで作った一句一句についての思いは、鮮明に心に残っています。　俳句が愛され親しまれているのは、私達が住む素晴らしい国の四季の豊かさや、言葉の美しさ、それに加えて、俳句を通しての交友関係が強く結ばれていく事です。何より俳句は自分自身を表現できる事が一番の魅力で、且つ生き甲斐である事でしょう。この国に生まれた幸せを感じ、大いに俳句と吟を楽しみたいものです。「苦あれば楽あり、楽あれば苦あり」と書いた佐々木邦氏のユーモア小説の一説を思い出し、さらなる精進をしたいと思っております。また、俳句に興味をある方に入会の勧誘をして頂いて「吟友の輪」を一緒に広げたいと思いますので宜しくお願いいたします。皆様のご健康とご健吟を祈り申し上げます。

講師出句

『獺祭忌』

実重（さねしげ）万葉（まんよう）（埋み火　同人）

世の中の少しずれゆく避暑地かな

職業に貴賤なきとや赤まんま

生きるとは食べる事なり獺祭忌（だっさいき）

古書街に身を委ねたる秋の暮れ

団栗の土に還ってゆくところ

武蔵野に取り残さる熟柿かな

講師出句

『出嚏子も』

池田笑子（若葉同人）

青芝を蹴つて駿馬の美しさ

紙魚（しみ）ひとつ寄せず空海自筆の書

鉦叩きおもひだすひとみな鬼籍

紫式部をとめさびだる色に咲く

空薫や比叡山を拝す紅葉の間

出嚏子もなくて前座の足袋真白

目次

俳号	氏名	頁	俳号	氏名	頁
ひさ	稲垣ひさ	一	壽	藤原・寿子	十二
てるを	鵜飼輝夫	二	桜子	本多敦子	十三
童人	川口榮三	三	をさむ	細川修	十四
朝香	河合節子	四	道人	前田道紀	十五
利広	菊地利廣	五	いくよ	三須以久代	十六
明山	小林智子	六	のぼる	耳塚昇	十七
陵人	鈴木重成	七	得自楼	湯山徳次郎	十八
順治	徳本順治	八	蓮花	池田康子	十九
千舟	橋本隆一	九	烏城	磯田貞二	二十
玄獣	八田豊	十	龍慶	岩崎泰俊	二十一
如泉	林治一	十一	合風	久保合介	

『夏帽子』

稲垣ひさ（ひさ）

老いたとてセンス気にして夏帽子

花火師の腕を競いて空を見る

安らぎの家族に感謝　敬老日

散る紅葉裏と表を見せつ落ち

冬に入る被災地棄農如何なりや

『日傘の女』

鵜飼てるを（輝夫）

亡き友を偲ぶ小径に野菊咲く

前をゆく日傘の女（ひと）や母想う

暗闇のさらに深きか虫すだく

掃き寄せて掃きよせ桜紅葉かな

隣り家の雨戸閉む音冬に入る

街路樹の残り葉飛ばし師走風

『八十と七七』

川口童人（榮三）

襟元をやめて帽子や赤い羽根

雲の峰行方しめせよ東西

秋風や大蛇（おろち）の松の枝ゆする

雨上がり山路楽しや紅葉狩り

八十（やそ）と七七（なな）手を取りあわん冬の入り

太極拳齢を計る師走かな

『菊香る』

河合朝香（節子）

測量士秋草に佇（た）ち手を高く

落葉炊き求人ビラと共に舞う

降るでなし晴れるでもなし冬に入る

菊香る新聞小脇に水をやる

鉢あけば赤のまんまのひとりじめ

新聞の折り込み重き師走かな

『秋深し』

菊地利広（利廣）

旅行誌に紅葉の便り茶の間かな

丸の内ビルも並木も冬日和

秋深し街の姿と神田川

コンクール時雨に暮れて武道館

ウインドウ新蕎麦とあり神保町

西郷像師走のアメ横選挙カー

『法要』

小林明山（智子）

法要の墓石かげりし落葉焚

霧深く嫋嫋（じょうじょう）となる寺の鐘

濡れ紅葉美しければ踏まずゆく

柿の実の二つとなりて身じろかず

葭障子母の想いを通しけり

足にふる夏座布団の心地よさ

『色映えて』

鈴木陵人（重成）

鳥一羽翔昇るごと雲の峰

墨染めの僧の法衣や照落葉

禅寺に寂光映えて紅葉揺る

風の立ち落葉踊るや冬に入る

歩き人浴びる西陽や冬に入る

師走路の銀杏並木や走り人

『故郷』

徳本順治（順治）

故郷や浜に海亀雲の峰

故郷（さと）帰り喜寿の仲間と紅葉狩

空晴れて水面さざめく秋意かな

濡縁に供えものあり月見酒

芦の花水恋しげに競いけり

街路樹の枝切り落とし冬に入る

『雲の峰』

橋本千舟（隆一）

釣舟のちらばる沖や雲の峰

紅さして花の横向き思草

根刮ぎ（ねこそ）の倒木のあり虫の秋

公園のベンチ塗替へ初紅葉

立冬や松の梢を風渡る

遠富士を眺め峠に年惜しむ

『風渡る』

八田玄猷（げんゆう）（豊）

兵児（へこ）をしめ祭衆浴ぶ力水

夕焼けに一声だけの法師蝉

多摩川を風が渡りて彼岸花

青空に風渡るらし鰯雲

枝たわわ採られぬ柿に初時雨

取材終え小春日和の帰り路

『古　暦』

林　如　泉　（治　一）

陽に映えて静かに散るや塚もみじ
烏去り後の静寂や暮れ早し
梅雨寒を愛犬めげずかけまわる
新聞の折込どさと年の暮
古暦一枚となり年惜しむ
柿落葉ちりかさなりて美しき

『秋　桜』

藤　原　壽　（寿　子）

秘密めく蛍袋の咲き処
おしゃれとははみ出す勇気サングラス
秋桜五百万本のパラダイス
三本のすすき加へて見舞けり
愛の羽根もうむなもとを飛び立てり
眼に見えぬ事の恐さや神の留守

『ひとり』

本多桜子（敦子）

冷麦にひと手間かけてわたし流

戻り梅雨そっと窓閉め夫忍ぶ

雲の峰足取り軽くひとりゆく

秋立ちて静寂の中にひとり居り

山肌に錦綾なす紅葉かな

冬に入る風に吹かれて木の葉飛ぶ

『風船葛』

細川をさむ（修）

仏壇に灯され回る走馬燈

風船葛あるかなきかの風に揺れ

妻一語我も一語の夏の夜

椎の木に命の限り秋の蝉

夕日背に高崎観音秋高し

師走市人人人にいない人

『零余子飯』

前田道人（道紀）

鮎好きに残る一匹（いちび）も進ぜよう

はぜる粗朶　糅（かて）は零余子（むかご）と決めてあり

敬老日禿げて笑みあるクレヨン画

病む母のねいき窺がう獺祭忌（だっさいき）

昔日を過去帳に問う彼岸花

障子ひく　ひと気にならぬ高鼾

『菊の香』

三須いくよ（以久代）

黒松の幹の鎧や秋日和

真葛（さねかずら）道は左右にわかれをり

冬に入る弥彦の麓風つよし

菊の花解くも無言の香にひたる

黄落やしだれ桜の吉祥寺

経蔵の宝珠にしみし曇り空

『はぐれ道』

耳塚　のぼる　（昇）

子鴉の空見上げおり雲の峰

はぐれ道漏れ日に明かき思草

窓開き眺む狭庭の初紅葉

故郷（さと）からの荷物紐解く冬の入り

暮れかかる庭にひょっこり尉鶺（じょうびたき）

知らんふりきめて湯槽の師走かな

『千屈菜』

湯山　得自楼　（徳次郎）

河骨の葉裏を返しかがよへる

千屈菜（みぞはぎ）の翳りてはまた風に揺れ

灯下親し郷土の伝記読顧る

落葉泛（う）く波紋は鯉の顎（あぎと）かな

障子貼る独り住まいの徒然に

義士祭や三百年の世を憂う

『太陽を』

池田蓮花（康子）

太陽を追って日傘をさしにけり

新涼の改札口で人を待つ

扇風機いきなり風が飛び出せり

葉っぱなく柿の実ひとつさみしそう

夏過ぎて吟の舞台に着物ふえ

シクラメン音ある街に色そえる

『年惜しむ』

磯田烏城（貞二）

帰敬式（ききょうしき）　寺院に一叢（ひとむら）　彼岸花

落葉掃く独居の庭に妻恋し

八十路越えて想い出淡し遠花火

稚拙なる我が句温め年惜しむ

着せ藁の中に紅白寒牡丹

選句『流れ星』

岩崎龍慶（泰俊）

流れ星山の彼方を狙い打ち　朝日新聞

山がよぶ極まる秋を歩きけり　朝日新聞

カーテンがゆれて暑さも少し揺れ　ＮＨＫ

仕事終え冷酒の中に沈潜す　朝日新聞

声までも日焼けしそうな一と日かな　朝日新聞

水撒くや庭生き生きと呼吸せり　朝日新聞

あとがき

千代田岳精会　自作自詠（俳句）研究会は、平成二十二年三月の発足以来二年十ヶ月を経過しました。その間、鈴木会長初め一一名の参与の先生方のご支援とご理解を頂き変遷を経ながらも、現在は、橋本リーダー以下三十名近くの会員を擁しながら俳句の勉強に励んでいます。

会の運営は、橋本リーダーを中心に、運営委員として前田・湯山（不肖）の両顧問と、本多・川口・鵜飼・細川の七名で構成され、運営担当＝本多・鵜飼、編集担当＝川口、企画担当＝細川が、それぞれ受持ち協力しながら、資料等編纂・印刷等の実務を分担し実施して参りました。お陰様で順次成果を揚げ、昨年は吟行会を二回（深大寺公園・国立科学博物館付属自然教育園）行い、部外講師として「埋み火」同人・実重万葉先生、「若葉」同人・池田笑子先生のご薫陶を受けました。また、当研究会では、俳句誌『湧水』を作り会員の作品を登載発行し好評を得たので、今後、年二回発行する事にいたしました。此れも偏に皆様のご声援と各委員の連携と協力の賜と思っています。

自作自詠（俳句）研究会
顧問　湯山　得自楼

俳句自作自詠研修会の行事

（一）例　会＝毎月第二火曜日午後
基礎研修・自作自詠・句評
部外講師の指導など

（二）行　事＝吟行会・納会・特別研修
その他

（三）句詩の発行＝句詩の発行は年二回
原則一月・七月発行

◎『俳句を作って楽しみましょう！』
俳句自作自詠研修会へのご入会をお待ち致します

千代田岳精会
自作自詠研修会（俳句）役員

参与	運営委員
鈴木陵人	前田道人
磯田烏城	湯山得自楼
岩崎泰俊	橋本千舟
林如水	本多桜子
耳塚のぼる	鵜飼輝夫
菊地利広	川口童人
徳本順治	細川おさむ
池田蓮花	
八田玄猷	
小林明山	
藤原　壽	

運営	
顧問	
顧問	
リーダー	
運営担当	
運営担当	
編集担当	
企画担当	